さんむのふるさと散歩 NO.45

山武市の仏像

今年の正月休みの折、テレビ番組を見ていたら、「日本中にある神社やお寺の数を足したものと、日本中にあるコンビニエンスストアの数はどちらが多い？」という問いかけがありました。

「今の日本、ちょっと街中を歩けばコンビニを目にするので、断然コンビニが多いよね！」と思ったら、不正解。

答えは神社・寺の数が圧倒的に多いのだそうです。ちなみに、コンビニの店舗数約四万七千、神社の数約八万五千、お寺の数約七万七千だそうです。

今の生活感覚で言うと神社やお寺に行くよりも、ちょっとコンビニに寄ってお弁当やおかしを買ってくるのが日常的ですが、私たちのおじいさんやおばあさんより上の代、つまり太平洋戦争が終った頃、今から七〇年位前までは、神社やお寺はもっと生活に身近な存在だったようです。

それでは、当時の人々と神社やお寺の関係はどのようなものだったのでしょうか。

明治時代の初めまで、日本全国には約二〇万の神社があったそうです。

明治時代の中頃になると、ひとつの町村につき神社をひとつに統合するよう指令が出されました。

一町村につきひとつに統合された神社やお寺は、町村民の精神のよりどころとして、「村の鎮守の神様（神社）」や「村のお堂・道場（寺）」と呼ばれるようになったのです。

当時は現在のように科学万能の時代ではないので、天候による作物の出来・不出来や地震等の自然災害、天然痘や麻しん等の病気の流行など、事あるごとに人々は神社やお寺に集い、神や仏に祈りを捧げていたのです。

考えてみれば、科学万能の現代ですら、五穀豊穣（農作物が多く実ること）や豊漁を感謝する祭礼や、季節の節目（初詣・御盆等）、人生の節目（初宮詣・七五三・結婚式・葬式等）の行事には神社やお寺と関連がありますね。

市内各所でみられる「オビシャ」や「子安講」も、もともとは神社の境内や、お寺の道場等に集まって行われる行事でした。

さて、神社には神様が「ご神体」として、お寺には仏様（仏像）が「ご本尊」として祀られています。

歴史民俗資料館ではこの度、市内の各地区より仏像を集めた企画展を開催します。

展示する仏像は、製作年代や製作者はさまざまですが、仏像に込められた地域の人々の熱い思いは共通のものです。

あなたも市内の仏像に会いに来ませんか。

問 歴史民俗資料館 ☎(82)2842

☎／市外局番の記載のないものは『0475』です